

『満ち足りた散歩者』

CAST

- 男1……………(お稲荷さんになった男)  
男2……………(男1を狙う男)  
男3……………(たかる男)  
男4……………(貢がせる男)  
女1……………(運が悪くない女)  
女2……………(縁を勧める女)  
女3……………(お参りに来る女)  
女4……………(お参りに来る女)

夜。

笹に囲まれた朱色の鳥居。

こでんまりとした稲荷神社である。

そして笹の葉には短冊がぶらさがっている。

一見して……ここが街の片隅の、しかも五階建て雑居ビルの屋上であるようには見えない。

が、この敷地全体が手摺によって囲まれているのと、そしてその手摺に寄りかかって男（男1）が下を見下ろしているのが辛うじてこの

場

所を物語っている。

男1  
…。

そして、南瓜ほどの大きさの石をのみと金槌で削っている男（男2）がいる。

男2  
…問題は小便なんだ。

男1  
…。

男2  
普通、大人で2リットル。少なくとも1.5リットルは出るらしいんだ、一日にさ。ペットボトルって大抵1.5リットルだろう。あれにはちゃんと理由があったんだな。健康なら一日に最低あれ一本分は水分取らなきゃならないって寸法だ。だって出るんだからな。イオン飲料水なんかじゃ駄目だ。水だ、水。ただの水が一番だってな、そう言うんだよ、医者のが。…毎日1.2リットル。それが俺にとつて必要な水の量らしい。…渴いても渴いてなくても1.2リットル。それ以上でもそれ以下でも駄目らしい。

男1  
…世間じゃ水不足で米も研げやしないって言うのにな。

男2  
まったく間の悪いやつだよ、腎臓ってやつは。

男1  
でも、それだけでいいのか。

男2  
塩分取らずにな。

男1  
案外簡単なんだな。

男2  
その辺は単純なんだ、腎臓ってやつは。

男1  
ふうん、そんなんで直っちゃうのか。

男2  
直りやしないって。

男1  
直らない？

男2 進行させないってだけなんだ。おまけに一日の量を計らなきゃならないらしい、毎日毎日……。

男1 何の。

男2 もちろん、小便のさ。

男1 厄介だな。

男2 そう、厄介なんだよ、腎臓ってやつは。

男1 いつまで続けるって。

男2 死ぬまでさ。

男1 ……。

男2 執念深いんだな、腎臓ってやつは。

男1 間が悪くて単純で、それでいて厄介な存在で執念深い……まるで女房だな。

男2 ああ、出来の悪いな。……一生顔色伺いながら付き合って行かなきゃならない

んだ、俺は。

男1 さつさと別れちまえ。

男2 え？

男1 ス。ハツと切っちゃえて言うてるんだよ。

男2 うん……まあ……。

男1 そんな役立たず、いつまでも腹の中に置いといたって仕方ないじゃないか。

男2 そりゃそうなんだが……別れるとなると代わりがいるからなあ。

男1 どこにでも転がってるだろ、代わりなんか。

男2 そうかな。

男1 そのために日本臓器移植ネットワークなんてもんがあるんじゃないか。今

時、黄色いカードなんか郵便局にだって置いてあるんだから。

男2 うん……。

男1 別れ際ってのは肝心なんだ。

男2 そうは言っても……簡単には取り替えられないだろ。

男1 そんなことないって。いつも隙さえあれば切り刻んでやりたいって考えてるん

だ、医者なんて連中は。

男2 そうじゃなくて、「つちがさ。……いざそう思うとやりきれなくてさ。

どうして。

男2 だってこいつが悪くなった原因は少なからずも俺にあるわけだしさ。なんだ

かんだ言っても永年「コソコソ働いてきてくれたんだ。それを「悪くなりまし

た、ハイサヨナラ」じゃ少し冷たすぎやしないかな。

男1 ……甘いなあ。

男2 え？

男1 そういう態度だからつけあがるんだぞ。過去を引き摺るな。もうそいつは昔

のそいつ

じゃないんだ。

だけどなあ…。

男2

だいたい直らないってことは修復不可能ってことなんだぞ。破局だよ、破局。

男2

うーん…

男1

畳と女房は新しい方がいいって言うじゃないか。

男2

新しいたって結局誰かの使い古しなんだから…。

男1

鮮度の問題じゃないさ。新しい関係を結び、築き上げるってことだよ。

男2

うまくいくかな、拒否反応だってあるって聞くし…。

男1

いざとなったら作り物でもいいじゃないか。今なんか、すごく精巧なのが出来るんだってな。本物の肌触り、スウェーデン直輸入のさ。

男2

…何の話してるんだ、お前。

男1

腎臓だろ、決まってるじゃないか。

男2

ならいいんだけど。

男1

とにかく決めるのはお前自身なんだ。

男2

…少し考えさせてくれ。

男1

やれやれ…。

男2

…突然の宣告で混乱してんだ。

男2、どうやら作業がうまくいかない様子。

男2

…駄目だ。のみの調子も今ひとつ…。木彫りの方が楽だったかなあ。

男1

病名、なんだっけ？

男2

慢性腎不全。

男1

慢性…：なんかヤバそうだな。

男2

いや実際ヤバイみたいなんだよ。

男1

人事みたいに。

男2

…歴史は夜作られる。尿は腎臓で作られる。

男1

なんだそりゃ。

男2

これでも 一大事だとは思ってたよ、一応な。

男1

とにかく健康にだけは注意してくれなきゃ。

男2

ありがとう。

男1

…（男2を見る）

男2

…何。

男1

いや…別に。

男2

うん、やっぱり石だな。初志貫徹あるのみ。…なあ、さっきから何見てるんだ。

男1 え？

男2 ずっと気にしてるけど……面白いモンでもあるのか。

男1 うん……人が倒れてるんだよ。

男2 どこに。

男1 ほら、あそこ。……団子屋の店先に。

男2 え……どこに。

男1 看板の向こう側……首だけもたれるようにして……。

男2 本当だ。

男1 動かないんだ。

男2 ……サラリーマン風だな。

男1 動かないんだよ。

二人、しばし下を見下ろす。

男2 ……ただの酔っ払いじゃないかな。

男1 そんなところだろうな。

男2 ……。

男1 ……(見てる)

男2 面白い？

男1 ああ。

男2 ふうん。

男2、石削りの作業に戻る。

男1 あれ、面白くない？

男2 さっぱり。

男1 どうして。

男2 だって、動かないモノじつと見てたって面白くないだろ。

男1 動かないから面白いんじゃないか。動いてるモノはそのうち動かなくなるだ

けだけど、動かないモノってのはそのうち動き出すかもしれないんだぞ。

男2 そりやそつだろうけど……。

男1 な、面白いんだよ。

男2 そのまま動かなかったら。

男1 通行人が気付く。そうなりや事態が動くじゃないか。いずれにせよ動き出す

ことには違いなんだ。

男2 興味ないね。

男1 そんなことないって。  
男2 そんなことある。  
男1 興味津々。  
男2 全然。  
男1 あっ動いた！  
男2 うそ。

男2、思わず身を乗り出すようにして見てしまっ。

男1 ……みる。  
男2 くそっ騙したな。

男2、また作業に戻ろうとする。

男1 おっ、立ったぞ！  
男2 ホント？（見ちゃう）  
男1 ……  
男2 ……  
男1 な、面白いんだよ。

男2、また作業に戻る。

男2 ……からかうのはよせ。  
男1 おっ、動いた、動いた。  
男2 うるさい。  
男1 怒ると腎臓にさわるぞ。  
男2 面白がってないで助けにでも行ったらどうなんだ。  
男1 助ける？俺が？  
男2 人助けだろ。  
男1 頼まれてもいないのに？  
男2 俺がお前ならそっするがね。  
男1 ならそっしなよ。  
男2 あいにく俺は「お稲荷さん」じゃないんでね。  
男1 それ、もうそろそろキリつけろよ。  
男2 今、大事なところなんだ。  
男1 だいたいいつになったら出来るんだ。

男2 そのうち出来る。

男1 必要ないよ。

男2 なんか落ちつかないんだよ。あるべきものがちゃんとないとき。まあ見てろって、立派な「狐」を鳥居の前にデブーんとさ。

男1 そう言いながら何か月経ってると思ってるんだ。

男2 ほっとしてくれ。集中できん。

男1 …あれ？

男2 ん？

男1 おい…あいつ変だぞ…。

男2 もういいって、それは。

男1 馬鹿、今度は本当だ。

男2 …。

男1 …変だぞ。

男2 …。

男2、また来て見る。

男2 どう変なんだ。

男1 ほら、全然動かないんだ…。

男2 …。

男1 な、やっぱり面白いんだよ。

男2 …ふざけるのもいい加減にしろよ。

男1 あれ、怒ってる。

男2 当たり前だろ。しつこいんだよ、お前は。

男1 「殺意は怒りの延長線上にはない。それは深い絶望の果てに生まれるのだ…。」

男2 ？

男1 宮沢大蔵大臣の言葉だ。

男2 うそつけ。日本の政治家がそんな気の利いたこと言つか。

男1 …少しは殺意が湧いてきたか。

男2 え？

男1 沸くわけないか、こんなことで。

男2 …。

男2、作業の場所に戻る。

男2

…くだらないことするんじゃないよ。

男2、のみの先端を月にかざす。

男1

最近のお前を見ると…どうも…。

男2

どうも…なんだよ。

男1

いや、いい。

男2

言えよ。

男1

…忘れてるんじゃないかって思うんだよ。

男2

…。

男1

お前が何をしなくちゃいけないかって事をさ。

男2

…なんだ、そんなことが。

男2、刃の先をシャツで拭いたり…。

男2

…別に…忘れちゃいないよ。

問。

男2

いつだって準備は出来てるんだ。

男1

…。

男2

安心しろよ。ちゃんとあの世に送ってやるから。

男1

なら、いいんだけどな。

男2

…やっぱりそうだ。ずいぶん刃毀れしてやがる。

男1

明日、ついでに買っといてやるよ。

男2

切れ味のいい奴をな。

男1

判った。

男2、また石を削り始める。

男1

…明日も雨は降りそうにないなあ。

男2

記録的だって言ってたぞ。

男1

「こんなと毎年そんな」と言ってるな。

男2

そろそろ寝ろよ。

男1

お前もな。

男2

きりがついたらな。

男 男  
2 1

おやすみ。  
ああ、おやすみ。

男1、手摺から離れず下を見続けている。  
男2、石を削り続けている。

暗転

翌日の朝。

飛行機が低空で飛び去った。

男2は相変わらず石を削っている。

そしてOL風の女1が手摺のところを空を（飛行機を）見上げている。

問題は小便なんです。

…。

普通、大人で2リットル。少なくとも1.5リットルは出るらしいんです、一日にね。ペットボトルって大抵1.5リットルでしょう。あれにはちゃんと理由があったんだな。健康なら一日に最低あれ一本分は水分取らなきゃならないって寸法なんです。だって出るんだから。イオン飲料水なんかじゃ駄目だ。水だ、水。ただの水が一番だってね、そう言うんですよ、医者のお奴が。…毎日1.2リットル。それが自分にとって必要な水の量らしい。渴いでも渴いてなくても1.2リットル。それ以上でも以下でも駄目なんです。

…世間じゃ水不足で米も研げやしないのに。

まったく間の悪いやつですよ、腎臓ってやつは。

でも、それだけいいの。

塩分取らずにね。

案外簡単なのね。

その辺は単純なんです、腎臓ってやつは。

ふうん、そんなんで直っちゃうのか。

直りやしません。

直らない？

進行させないってだけ。おまけに一日の量を計らなきゃならないんですよ、毎日毎日…。

何の。

もちろん、小便の。

厄介ねえ。

そう、厄介なんですよ、腎臓ってやつは。

いつまで続けろって。

死ぬまでです。

…。

男2

女1

男2

男2

執念深いんだな、腎臓ってやつは。

女1

間が悪くって単純で、それでいて厄介な存在で執念深い……まるで亭主だなあ。

男2

ああ、出来の悪いね。……あれ、ヨコヤマさんもう結婚しちゃったの。

女1

いいえ、まだよ。

男2

そうだよ、今、亭主って言ったから。

女1

そんな感じだろうなあって。

男2

いつなんです。

女1

え？

男2

結婚。

女1

もうじきよ。

男2

なんかずっともうじきもうじきって言うてる気がするんだけどな。

女1

二年越しかな。

男2

どういう人。

女1

忙しい人。いつも忙しい、忙しいって。でもね、もうじきって思ってるのも悪く

男2

はないから。

女1

判らないな、自分には。

男2

何が。

女1

憧れがある訳？その、結婚に。

男2

生活にね。……毎朝近所の主婦達と愚痴言い合って……スーパーのチラシとに

女1

らめつ、みのもんた観て昼寝して、毎日してもたまる洗濯、家計簿つけて、

男2

小銭数えながら深いため息……家事に追われて一生を終える。……素敵よ

女1

ね。

男2

そうかなあ。

女1

少なくとも今の私よりは充実してるわ。

男2

その……よく忙しいって言うの、彼は。

女1

忙しい、疲れた、時間が無い。会ったと必ず「の三つは言うわね。

男2

そう……。

女1

何？

男1

いや、いいんだけどさ。

女1

言うつてよ、気持ち悪いじゃないの。

男1

まあ、ヨコヤマさんだから言うつちゃうけどさ、俺前に半年ほど刑務所に入って

女1

たんだ。

男1

知ってるわよ、そんなこと。

女1

でね、その時「一緒だった奴に結婚詐欺の男がいてさ……ああ、言うつておくれど

男1

ヨコヤマさんの彼がそうだったって言うてるんじゃないからね……で、そいつが言う

女1 には「忙しい」「疲れた」「時間がない」「三つを言う男には気をつけるって  
なぜ。」

男2 そう言われるとき、「こっちから連絡取りづらいでしょ。向こっちから連絡無く  
ても仕方ないって思っちゃうし。それが第二の手段だって言うんだけどね。」

女1 ふうん、第二の手段か……ってことは第一の手段もあるのね。

男2 もちろん。それが一番重要らしいんですけどね。まあ、第一って言っくらいだ  
からね。

女1 どのなの。

男2 やっぱり、心配ですか。

女1 そう言う訳じゃないけど、聞いてみたいじゃない。

男2 それがね、

と、男1が戻ってきた。

男2 あっ、おかえり。どうだった。

男1 うん、よかったよ。実にしみじみとした時間だった。久しぶりだな、こんなに  
いい散歩が出来たのは。

男2 そりや良かった。のみは。

男1 十時からだっとき、金物屋。

男2 今、何時です。

男1 十時二十分。

男2 やってるじゃないか。

男1 俺が前を通った時はまだ二分前だったんだ。

男2 待てばいいじゃないか。二分くらい。

男1 俺は買い物に行った訳じゃないからな。

男2 お前が言い出したんだぞ、ついでに買ってくるって。

男1 散歩のついでに言った筈だ。

男2 だって、ちょっと待ってりや買えたんだろ。

男1 判らない奴だな。待つってことは立ち止まるってことだろ。散歩ってのは歩く

男2 から散歩って言うんだよ。

男1 別に突っ立ってなくてもいいだろう。

男1 なら何か？俺に二分間足踏みしてろって言うのか。

男2 馬鹿だなあ。一分進んで、一分引き返せばいいじゃないか。

男1 なんで？

男2 なんてって、金物屋のシャッターが開くからだよ。

男1 いいか、もう一度いどうぞ。俺は散歩に行ったんだ。買い物に行ったんじゃない。

男2 そんなことは判ってるんだよ、馬鹿。

男1 いいや全然判ってない。引き返した時点で俺の行動は散歩じゃなく買い物になってしまっじゃないか。

男2 どうして。

男1 散歩するのは目的もなくただプらプらすることに意味があるんだよ。目的が出来ちゃったらその瞬間に散歩じゃなくなるの。判ったか。…ホントにもう、いちいち説明しなくちゃ判らないんだよ、このオタンコンナスには。

女1 はあ。

男2 ……。

男1 あゝあ、せつかくいい朝を迎えたって思ってたのに…台無しだよ、台無し。

り と、ブツブツ言いながら男1は『お稲荷さん』の社の中へ…すっぽ

入ってしまった。

小さいのでかなり窮屈だろう。

男2 ……俺、オタンコンナス？

女1 どうでしょう。

男2 くそっ…もう、やめだ、やめやめ。こんなのみじゃ掘れやしない。

女1 あの…もういいかしら。

男2 え？

女1 第一の手段。

男2 ああ、そうそうそう。その話でしたね。

男1 (扉を開けて)どの話。

男2 なんだよ、いきなり出てくるな。

男1 そういふ言い方ないだろ。え、なに。聞かれちゃまずい話なの。

女1 いや、全然。

男2 ヨコヤマさんの結婚相手について考察中なんだよ。

女1 この人、私の彼のことを詐欺師だと言っつよ。

男1 詐欺師なのか。

男2 そうは言っていないよ。ただその傾向は少なからずもあるって話をしてたんだよ。そしたらお前が帰ってきてさ、訳の判らないこといっつもんだから。

男1 まだ訳分かってないのか、お前。

男2 いいよ、もうその話は…自分で買ってくるよ、のみくどい。

男1 始めからそうすりゃ良かったんだ。

男2 そうだな。お前の言葉を当てにした俺が馬鹿だったよ。…買ってくるさ、自

女1 分で。  
 男2 　　で？  
 女1 　　なにが？  
 男2 　　第一の手段。  
 男1 　　ああ、そうだった。それが重要なんですけどね。  
 男2 　　第一ってことは第二もあるってことかい。  
 男1 　　もちろんさ。「忙しい」「疲れた」「時間が無い」「の三つを女にインプットさ  
 せ  
 男1 　　るのが結婚詐欺師の第二の手段らしいんだな。  
 女1 　　言うの。  
 男1 　　ええ。  
 女1 　　なるほどな、でも、こいつに相談したって駄目だよ。  
 男1 　　別に相談した訳じゃないんですけど。  
 男2 　　おいおい、駄目ってことはないぞ。  
 男1 　　だってお前、力になってやれるのか？この人に。  
 男2 　　そりや俺だって、だてに人生の裏街道歩いてきたんじゃないからな。  
 男1 　　裏街道って程のもんじゃないだろう。  
 男2 　　コン泥だもんな。  
 女1 　　ハハハハハ。  
 女1 　　で？  
 男2 　　でって？  
 女1 　　だから、第一の手段。  
 男2 　　ああ、それぞれそれ。それが重要なんですけどね。  
 男1 　　でもなんでお前そんなこと知ってるんだ。  
 男2 　　なんでってそりや。  
 男1 　　まさかお前。  
 男2 　　馬鹿言え。聞いたんだよ、入ってる時に。  
 男1 　　そうだよな。お前が結婚詐欺なんて出来るはずないからな。  
 男2 　　どうして。  
 男1 　　そりややっぱりいい男じゃなきゃ無理だろ。  
 男2 　　そう思うだろ、ところがその男も全然たいした事ないんだよ。  
 男1 　　へえ。  
 男2 　　顔なんてのはあまり重要じゃないみたいなんだ。  
 男1 　　でもやはり愛されるってことは重要なんだろうな。  
 女1 　　そりや重要だよ。重要、重要。  
 女1 　　で？

男2 なんてしたっけ？

女1 第一の手段。

男2 ああ、そうだそうだ。重要なのはそれ。すいませんね、こいつが横からチャチャイれるもんだから。

男1 チャチャってなんだよ。

男2 そりやお前、秀吉の奥さんだろ。

男1 馬鹿。それは淀君。

男2 あれ、じゃあ千姫ってのは？

男1 いとこじゃないかな。

女1 茶々でいいんです。淀君が茶々。千姫はその妹の娘。

男1 あ、そう。覚えとかなきゃ恥かくな。歴史ってのは重要だからな。

男2 うん、重要だよな。重要、重要。

女1 で？

男2 え？

女1 ……第一の手段。

男2 ああ、いかんいかん。そう、それが重要なんだった。

男1 こいつはすぐに忘れるんだよ。

男2 そんなことはないよ、ほら、ちゃんと忘れずに水飲んでるし。

と、やかんと軽量コップ。

男1 お前、それ小便計ってたコップじゃないか。

男2 仕方ないんだ。目盛りの付いたのコレしかないんだから。

男1 しかし清潔さは重要だからな。

男2 そう重要なんだ。重要、重要。

女1 あの…。

男2 なんです。

女1 ……第一の手段。

男2 あつ、それ。それが一番重要なんだった。

男1 グズグズしないで早く話してやれ。

男2 すまんすまん。なんで脇道にそれちゃうんだろ。

男1 そもそも人間にとって脇道ってのは興味あるもんなんだよ。

男2 小さな冒険ってやつだな。

男1 そうそう、冒険心は重要だからな。

男2 うん、重要な。重要、重要。

女1 ……もついいです。

男2

なにか。

女1

第一の手段。

男2

あつ、そうだった。重要なのはそれだったんだ。駄目だな、俺って男は本当にもう……。

男1

後悔してる暇があったらさっさと話せよ。

男2

で、そいつが言っにはね

と、男3がいつの間にか立っている。

頭に包帯を巻いている。

女1

あ……。

男3

やっぱりこんな所にい。

女1

御免なさい、ちよつとのつもりだったんだけど。

男3

課長が探してましたよ。書類のコピーどこにやったって。

女1

あれ？机の上に置いておいたんだけど。

男3

無い無いって騒いでたよ。

女1

確かに置いた筈なんだけどなあ。

男3

この前もそんなことあったじゃないか。ヨヤマさん何かあったの？最近仕事、ウワの空だよ。

女1

別に……何も無いけど。

男3

そう……。

男1

大変だったな、大丈夫か。

男3

ええ。

男1

まさか夜中に倒れてた男がお前だったとは思ってもみなかった。

男3

え、知ってたんですか。

男2

こいつ、ここから見てたんだ、朝までずっと。

男3

救急車呼んでくれたら良かったのに。

男1

酔っ払いだと思ってたからな。

男3

俺は一体どこに倒れてたんでしょうね。

男1

あそこだよ……ほら団子屋の看板の所でさ。

男3

うひゃ、あんなところだ。

男1

覚えてないの。

男3

さっぱり。

女1

それじゃあ私、先に行つてます。

男3

駄目だよ。

女1

え？

男3 ちよつと話したいことがあるからさ。  
女1 ……  
男3 だって書類机の上に置いたんでしょ。間違いなく置いたんだよね。  
女1 ええ…たぶん。  
男3 だったらいいよ。そのうち自分でみつけるさ。  
男1 急いの方が良くないかな。あの人、イライラするとすぐ怒鳴り散らすからな。  
男3 それなんですよ、これ（包帯）の原因は。僕がちよつとしたミスをしてしまったね。いや、金利計算を間違えちゃいましてね、一桁。「お前の顧客分今日中にやり直せ」って怒鳴り散らされて…たった一人で残業ですわ。終わったのが十二時半…エレベーターを降りたところできなりガツン、気が付いたら病院のベッドでした。  
男1 凶器は何だったの。  
男3 ハンマーかバールか…とにかく鉄製のものじゃないかって医者は言うんですけどね。おかげで三針縫いましたよ。  
男1 よくそれだけで済んだなあ。  
男3 たいした強運だって言われました。  
男2 何か盗られた。  
男3 いや、なにも。  
女1 警察には言っていないの。  
男3 まだね。  
男2 無駄無駄。三針くらいじゃ動かないよ。何も盗られてないんだし。  
女1 だけど襲われたんだから。  
男1 せめて頭蓋骨は割れなきゃな。  
男3 十二時半頃、不審な人物見ませんでした？走り去る後ろ姿とか。  
男1 見たか？  
男2 いいや。  
男2 そうですか…。  
男3 通り魔だな。きっと誰でも良かったんだ。  
女1 そうかしら。うちは結構恨み買われる商売してるから…。  
男3 金融会社なんてどこもそうだよ。…さて、戻ろうか。  
女1 ……でも。  
男3 何かここに用があるの。  
女1 話の途中だったのよ。…ね、第一の手段。  
男3 長くなります？  
男2 いや、話自体はそうでもないと思うんですけど、何故か本題に入れなくて。  
男1 今すぐ話しちゃえ。

男2 そうだな。で、そいつが言うにはね  
声 あのうち……。

と、声がかかる。

女2が出入り口のドアの所に立っている。

男2 ね、こんな具合なんですよ。  
女2 少しお邪魔させていただいていいですか。

女2、手にファイルを持っている。

男1 どうぞ。

女2 私、市の環境調査監視委員会屋上緑化促進計画第三調整部管理課から参りました、  
タナカと申します。

男1 は？

女2、男1に名刺を渡す。

男1 うわっ、凄い漢字。

女2 環境調査監視委員会屋上緑化促進計画第三調査部管理課です。

男1 ほとんど中国語だな、こりゃ。

女2 皆さん、そうおっしゃいます。

男1 で、何でしょう。

女2 ここビルの持ち主は四階のタチバナ金融さんでよろしいですね。

男3 私、タチバナ金融の者ですけど。

女2 屋上の管理をされている方は……。

男3 さあ、誰だろう。

女2 こちら管理者は入っていないようなので、どなたか……。

男3 ヨコヤマさん、知ってるっ。

女1 さあ。

男3 判った。この人達だよ。

男1・2 え？

男3 だつてずっとここにいるんだから。

女2 屋上緑化計画の調査なんですけど、よろしいですかね。

男3 行こう、ヨコヤマさん。

女1 でも……いいのかしら。

男3 いいよ。関係ない。

男3は女1を促すようにして出ていった。

男1 ……相変わらず無神経な男だな。

女2 お二人で「この管理を？」

男2 いや、自分は違います。こいつに雇われてるだけなんです。

女2 ここで何か作られてるんですか。

男2 ああ、これね。狐を作ってるんですよ。

女2 なるほど『お稲荷さん』の。小さくてかわいらしいのが出来そうですね。

男1 違うよ。初めはその石テカかったんだけど、削ってるうちにそんなになっちゃったんだよ。

女2 期待してます。頑張ってください。

男2 頑張ります。

女2 えーっと……もう「存じだとは思ってますが、一応これを。

女2、二人にビラを配る。

男1 ……「シックビル症候群」？

女2 数年前から問題になってるんです。建築素材、塗料などから有毒ガスが出るんです、

新築の場合なんか特に。植物にはそれらの汚染物質を除去する働きがあるんですよ。

男1 こんなおんぼろビルには関係ないよ。

女2 えー、「取り戻せ自然・生活にゆとりと安らぎ……を合い言葉に市が推進してまいりましたグリーンディング計画（屋上緑化計画）は、今年で三年目を迎えています。現在の普及率は六十五パーセントを超え、他の都市部からも注目されております。めざせ百パーセントグリーン都市」と、言うわけで市民の皆様のご協力のもと、私どもは屋上に自然を作ってまいりました。こちらは……去年ですね。

男1 そうですよ。いきなり来て勝手に竹植えてったんだ。

女2 最近どうでしょう、屋上の雰囲気は。

男1 ムカデが出て出て、とてもじゃないけどたまらないよ。  
女2 なるほどそうですか。

女2、メモ。

女2 とてたまらない……と。

男1 おい、ハートマーク書くなよ。いい方に取られそうじゃないか。

女2 見たところ利用者もたくさんいるみたいですね……(短冊を見て)七夕ですか。

男1 三階の子供たちがね。

女2 英会話教室のお子さん達ですね。笹の葉さーらさらあ……子供達がかわいく歌う姿が

男1 目に浮かびますね。

男1 そんなことしませんよ。

女2 ……目に浮かぶ……と。

男1 書くなつて。勝手な想像だろ、そりゃ。

女2 景色はいかがですか。

男1 景色？

女2 例えば……あそこの屋上には日本庭園、あちらには松林、向こうのビルには……杉林です。

男1 どうりで花粉が凄い筈だよ。

女2 すこい……と。

男1 いい加減にしろ、こら。

女2 えー、次に

男1 いいよ、もう帰ってくれ。

女2 あと三項目あるんですけど。

男1 適当に書きゃいいだろう、どうせ勝手に変えちゃうんだから。

男2 まあ、待てよ。もう少し話聞いてやれよ。

男1 なんて聞かなきゃならないんだ、くだらない。

男2 昨日隣のビルのオヤジに怒鳴られたのって、あんただろ。

女2 え……。

男2 聞いたよ。塩撒かれたんだって？

男1 あのオヤジでも怒ることあるんだな。

男2 どうせあちこちで怒鳴られてるんだ、この人。

女2 ……それは覚悟の上ですから。

男2 あんた、どうして嘘の報告書作ってるの？

女2 ……。

男2 隣のオヤジも文句言ってたよ。キッチンと施工してりゃまだいいんだらうけど、

女2 こんな遣付け仕事じゃ困っちゃうって。

女2 ……ええ、聞きました。

男2 だいたい今頃、何の調査なの。

女2 実施から三年目に入って評判を

男1 良いはずないだろ。ちよっとそれ、見せてよ。

女2　でも、これは…。  
男1　いいから。

男1、女2のファイルとペーパー捲る。

男1　ああ…なんだこれ、どこも誉めてばかり。

女2　…。

男2　本当だ。いくらなんでもこりや酷すぎるよ、あんた。

女2　…それが私の仕事なんです。

男1　ふうーん。

男1、女2にファイルを返した。

女2　…。

男2　あとどんな項目があるんだっけ。

女2　「緑化後、体調の変化はありましたか」

男1　「こいつが腎臓悪くした。」

男2　関係ないだろ、そりゃ。

女2　「今回の事業の評判について…。」

男1　だから、良くないって。

女2　…そりゃそうですよね。

女2、メモ。

男1　そうそう、ちゃんとそうやって書いてよ。

女2　…焦ってみたいなんです。この屋上緑化計画は松山市長の目玉の公約だったもんで  
すからね。

女2、書き直し始める。

女2　おまけにこの計画を実行し始めたところ、三年連続のカラ梅雨で水不足。屋上の植え  
込みなんかすぐに駄目になってしまいますし、それを補おうとして赤字が累  
積…駄目になった大量の苗木やらプランターやらでコミの山。それを補お  
うとして赤字が累積。もはやこの計画は完全に行き詰まってるんです。

男1　やれやれだな。

女2　私の長い肩書は苦悩の結果なんです。解決策を講じる度に部署が増えて…。

男2 ならここに書いてある普及率六十五パーセントってのも。  
女2 私の捏造です。

男1 2 ……

女2 そろそろイメージを塗り替えないと、来年の市長選が…。

男1 こんなことしたって駄目なもんは駄目だよ。

女2 ええ、私もそうだと思います。…でも仕事なんで…だいたい人間の都合で自然をど

うこうする事自体間違ってたんですね。

男2 いや、そんなことはないよ。

女2 え。

男2 雨が降れば問題なかったんだろ。雨が降ればさ。

男2、水を飲む。

もちろん軽量カップで計りながら。

男2 ただ、それだけのことだよ。

女2 ……

男2 あと二つ残ってるんだろ、項目。

女2 ……「緑化はあなたにとってどんなメリットがありましたか」

男1 特にないなあ。

男2 少しばかり風格が出たじゃないか。『お稲荷さん』の。

男1 そうやって書いどいて。

女2 はい。…：ありがとうございました。

男2 狙いは悪くないと思っつよ、俺はね。

女2 実はここだけなんですよ、屋上のこういつた『お稲荷さん』を活かして作られた緑は。

大抵は駐車場の裏とかに移転したりして。

男2 だって、ここにはちゃんと『お稲荷さん』がいるからな。

女2 そうなんでしょっつね。

男2 いや、実際そうなんだよ。後でお参りしてみな。どうか雨が降りますように「っつて。

男1 無茶言っつな。

女2 おみくじまで置いてあるんですね。

男1 うちのはよく当たるっつて評判なんだ。

女2 やっつてみよっつかな。

男1 百円。

女2、男1に百円渡して六角形の筒をジヤラジヤラジヤラ。

男1 何番？  
女2 への十八番です。  
男1 への十八番ね……

男1、ポケットの中からおみくじ。

男1 はい。

女2 はいって……。

男2 何がでた。

女2 「大吉」ですけど……。

男2 そりゃよかった。何て書いてある？

女2 「正直ものには福来たる」

男1 な、今日のあんたにぴったりだ。正直に生きなさい。

男2 そういやあ、メリットと言えはおみくじ結べるようになったよな。

男1 そうだな。それも書いといて。

女2 はあ。

男1 喜んでいいんだよ。「大吉」でしょ。

女2 でも、何か……これ、手書きだし。

男1 苦労して書いたんだよ、細筆で。

と、買い物帰りといった感じの女3がやって来た。

男2 こんにちは。

女3 こんにちは。……お参り、いい？

男1 いいですよ。

男1、また社の中に入った。

女3、お賽銭入れて鈴を鳴らして柏手。

女3 どうか猫のミミちゃんが見つかりますように……猫のミミちゃんが見つかりますように

……猫のミミちゃんが見つかりますように……。

と、もう一度柏手。

女3 それじゃ、よろしく。

男2 どうも。

女3、去った。

女2 ……。

男1、出てきた。

男1 またか…あそこの猫すぐに家出しやがる。

男2 お前、アキヤマさんとこの柵の取り付けは？

男1 それもあつたな。

男2 確か時間指定してたぞ。「どうか夕方の六時に柵が作ってありますように」って。

男1 とりあえずミニちゃん捜しに行つてくるよ。

男1、猫じゃらしを手に去って行った。

男2 ね、ちゃんというるだろ、『お稲荷さん』。

女2 はあ…。

男2 やつてみると結構大変みたいだね、神様ってのも。

女2 …便利屋さんみたいですな。

男2 そりゃそうだろ。

女2 え？

男2 だって便利屋みたいなもんだろ、この国の神様なんてさ。困った時の神頼みって言っじ

ゃない。

女2 でもどうしてあの人こんなことを？

男2 だって命を狙われているのにサラリーマン続ける訳にいかないでしょう。

女2 ……。

男2 いきなりいなくなったら会社の人達、困っちゃいますからね。

女2 命を狙われてるって…。

男2 私にね。

女2 …それは…あの…あなたがあの人を殺すってことなんでしょか。

男2 そうじゃないんですよ。あいつは私に「命を狙ってくれ」って言ったんです。だから、私

の仕事はあいつを殺すことじゃないんです。あいつの命を狙い続けることなん

ですよ。

女2 ……。

男2 そのあたりが非常に難しいんですけどね。

女2 ……確かに…。

男2、計量カップで水を計りながら

男2 俺がお参りしようかな、「どうか雨が降りますように」って。

男2、一気に水を飲み干した。

暗転

早い夕方。

飛行機が低空で飛び去った。

男1の姿も男2の姿もない。

女1、また空を（飛行機を）見上げて……

「アカシアの雨がやむとき」を眩くように唄っている。

女1 ……アカシアの雨にうたれてえ……このまま……死んでしまいたい……夜が明ける……日が  
のぼる……朝の光のその中で……

手には新聞紙に包んだ「何か」を持っている。  
と、男3が姿を見せた。

女1 あ……

やっぱりこんな所にい……いないの、連中。

女1 ええ。

男3 ふーん、なら丁度いいや。

女1 ……

男3 あれ、何持ってるの。

女1 お守り……

男3 また妙な作ってるのか、『お稲荷さん』は……いい加減ここから出てってもらいたい  
よね。

女1 何言ってるの。あなたが新人の時、お世話になったでしょ。今のあなたの願

客、あの人から譲って貰ったんじゃないの。

男3 「応、感謝はしてるさ。……ヨロヤマさんにもね。

女1 ……

男3 で、さっきの件なんだけど……三本指立てて（これだけ追加。

女1 ……

男3 無理？

女1 ……

男3 してごえないよね。

女1 ……  
男3 ひとつ聞いていいかな。

女1 なに…。

男3 これ（頭の包帯）…ヨヤマさん？

女1 え？

男3 これ…。

女1 そんな訳ないじゃない。

男3 ……そうだよね。

女1 ……

男3 ま、とにかく明日までに頼めないかな。

女1 ……

男3 都合つけといて下さいよ。

と、誰かくる気配。

買い物に行く途中といった感じの女4がやってきたのだ。

男3 ヨヤマさんてさ…運、悪いよね。

女1 ……

男3 （女4に）こんにちは。

女4 こんにちは。

男3、去った。

女4 どうも。

女1 （会釈）

女4はお賽銭を入れて鈴を鳴らした。

女1 あ、いませんよ。

女4 え、そうなの。

女1 仕事に出てるんじゃないかしら。

女4 うわっ大変だ、お賽銭入れちゃったじゃないのお。

女1 急ぎのお参り？

女4 そうなのよ…困っちゃったなあ。水運んで来てもらおうかと思ってたのに。

女1 水運ぶって？

女4 六時に小学校で水の配給があるの、三日分。あんた行かないの？

女1 私の住んでるあたりはまだ大丈夫だと思っけど。  
女4 どこ住んでるの。

女1 富士見台です。片道二時間半。

女4 うわっ大変だ、そりゃ。…よっ…あれ…ふんっ。

女1 何してるんです。

女4 うわっ大変だ、抜けなくなっちゃった。

女1 え？

女4は賽銭箱に手を突っ込んでお金を取り出そうとしていたのだ。

女1 ああ、なんでそんなに突っ込んだじゃったの。

女1も引く張る。

女1 よっ…駄目だなあ…ねじってみようか。

女4 痛い痛い痛い。

女1 どうしよう、誰か呼んでくるから。待っててくださいね。

女1、去った。

女4 …よっ…ふんっ…ふんっ…。

しばらく…。

と、買い物帰りといった感じの女3がやって来た。

女3 …。

女4 …。

女3 …ごめんなさい。

女4 あ…。

女3、逃げ去った。

女4 違うんですっ。

そして出入り口付近で男1の。

「あれ、どうしましたあ」

男1 ……なんだろうあの人、血相変えて……ああつ賽銭泥棒！  
女4 うわっ大変だ。  
男1 大変なのはこっちだ、この野郎。  
女4 ひいー。

と、男2が帰って来た。

男2 どうした。  
男1 賽銭泥棒だよ。  
男2 何！……あつ団子屋のババアじゃねえか。  
女4 私、ババアじゃないです。まだ26歳です。  
男2 嘘つけ。  
女4 26歳です。  
男2 これで縛れ。  
女4 違うんですう、違うんですう。

しめ縄で縛られる、女4。

さらに買物袋を頭に被せられる。

男1 どうしような。  
男2 とりあえず団子屋のオヤジに来てもらうか。  
女4 (ジタバタ)  
男1 ジタバタするな。

と、女1が走り込んで来た。

女1 ごめんなさい、なんか誰も……あ。  
男1 賽銭泥棒だよ。誰だと思う。  
女1 ……団子屋の奥さんでしょ。  
男1 あれ、よく判ったな。  
女1 その人、違うのよ。  
男1 え？  
女1 お参りに来て、お賽銭入れたんです。  
男1 どう見たつてお賽銭入れているところには見えないぞ。  
女1 だから、あなたがいないことを知って取り出そうとして。

男1 そうなの。  
女4 ……抜けないんです。  
男2 だろ、俺はおかしいと思ったんだ。  
男1 縛れって言ったのはお前じゃないか。  
男2 お参りの用件は何だったんです。  
女4 六時に小学校で水の配給があつて……お願いできませんか。  
男1 駄目駄目。その時間は柵の取り付け。

男1は社の回りをゴソゴソし始める。

男2 水の配給つて？  
女1 今晚から断水になるのよ、このあたり。  
男2 ……全然知らなかつたな、そんなこと。  
男1 おい、お前貰つてこいよ。水、無くなつたらやばいだよ。  
男2 ああ、そうだな。  
女4 ピンクの紙がなきや駄目ですよ。先日、配られたんです。  
男2 ……。  
女4 それに、今からじゃ遅いですよ。二時間くらい前から並んでいます。  
男1 なら俺が行つても無駄じゃないの。  
女4 うちの子に並ばせてありますから。  
男1 ああ、そういうこと。  
男2 ついに断水か……。

男2、やかんの水を計量カップに……。  
そして、やかんの水は無くなつてしまった。

男2 あらら……。  
男1 足りないのか。  
男2 あと300ミリリットル。  
女1 そのくらいならまだ会社のポットに入つてゐるでしょう。  
男2 助かります。

男2、水を一気に飲んだ。

男2 こんなことならのみじゃなくなつて水買ってこれば良かった。  
男1 買ってきたのか、新しいの。

男2 あれ…。  
男1 どうした。  
男2 のみどこいったんだろ。  
男1 持ってるじゃないか。  
男2 そうじゃなくて古い奴さ…お前こそ何探してるんだ。  
男1 釘抜きだよ。…それを取りに来ただけど…ヨコヤマさん見てない？  
女1 なんで私が？  
男1 …まいったなあ。  
男2 どこかに忘れて来たんじゃないのか。  
男1 昨日の昼にはあったんだけどな。  
男2 そんな昔の記憶あてになるもんか。…うちは今日の昼にあったものが無くなってんだ。

二人、あちらこちら探すが…。

女1 諦めなさいよ。  
男1 え？  
女1 ほら、「こつこつ」って諦めた途端に出てくるもんじゃないの。  
男1 そりゃまあ、そうなんだが…。  
女1 それより教えてよ。  
男2 何を。  
女1 第一の手段。  
男2 ああ、その話まだ気にしてたんですか。  
男1 いいじゃないか、もう。詐欺師じゃないんだろ。  
女1 だってあれだけ焦らされたら。  
男2 運の悪い女。  
女1 え？  
男2 あれ、今度は拍子抜けするくらいあっさり言えたな。  
女1 …運の悪い女？  
男2 そう。それが重要だって言うんですよ。とにかく運の悪い女を狙う。それが第一の手段。  
女1 へえ…。  
男1 そんなのいちいち見つけるの大変だな。  
男2 そうでもないさ。運が悪い女と悪くない女…二つに一つ、確率は五割だからな。  
男1 その男、どうして捕まったんだ。  
男2 運悪く、運の悪くない女を引っかけちゃったらしいんだな。  
女1 …運の悪い女を見つけて、口癖は「忙しい」「疲れた」「時間が無い」…か。  
男2 あれ、やっぱり心配？

女1 ううん、そんなことはないんですけどね。  
男2 相手はどんな人なの。  
女1 ……まあ、いいじゃないの。  
男1 恥ずかしいが、歳でもないだろ。  
女1 恥ずかしいのよ、彼、優秀な男だから。  
男2 優秀な男って…どんな男だろ。  
女1 彼、パイロットなんです。  
男1、2 おお…。  
女1 おまけに日本人じゃないんですよ。…ギリシャ人とメキシコ人のハーフで、元々はブラジル人なんです。  
男1 ……結局、二人なんだ。  
女1 今はアメリカ人。自分で航空会社を持つてるの。ネバダ州に本社があつてね、あとオランダとデンマークにそれぞれ支社を持つてるんです。代表取締役兼パイロットなのよ。  
男2 まさに優秀な男だな。  
男1 日本に支社は？  
女1 まだないの。アジア進出はマレーシアからだって言って…今、その資金繰りが大変らしくって。  
男2 どこに住んでるんです。  
女1 「応ネバダ州じゃないかしら、本社があるんだから。  
男2 「応って…。  
男1 そんな凄い男、一体どこで知り合ったの。  
女1 下山動物園。  
男1 え、すぐそこ？  
女1 私、誰かに写真を撮ってもらおうとして…その時、ペンギンを見ていた彼にたまたま頼んだのがきっかけ。  
男1 まてよ、何でそんな男が下山動物園でペンギンなんか見てるんだ。  
女1 そりやお休みの日だってあるでしょう。  
男2 彼、いくつなの。  
女1 今年四十二の筈です。大厄だって言ってたから。  
男2 外人に厄年関係ないでしょう。  
女1 でも歳より若く見えるんですよ。  
男1 ちよつと「めん…。

男1、男2を引っ張って隣のほうに。

男1 …詐欺だ。  
男2 え、そうかなあ。  
男1 そうだよ、決まってるじゃないか。  
男2 だけど詐欺にしては話が出来すぎてるよな。  
男1 どこが出来てるんだ。目茶苦茶じゃないか。  
男2 そこでよ、普通、騙すつもりならあんな出鱈目言わないだろ。  
男1 …ああ。  
男2 もっと理にかなったこと言っんじゃないかな。  
男1 …。  
女1 何よ、コソコソ話して。  
男1 いやいや、御免御免。何でもないんだ。  
女1 あなた達、彼の<sup>こと</sup>を見た<sup>こと</sup>あるんじゃないかな。  
男1・2 えっ？  
女1 前に一度ここに来た<sup>こと</sup>があるのよ、この屋上。  
男1 俺は知らないぞ。  
男2 そんなにちよくちよくこの街に来てるの。  
女1 ちよくちよく<sup>こと</sup>となら<sup>けど</sup>…自家用ジェット機でね。  
男1 見たのか、そのジェット機。  
女1 見られる訳ないじゃない。直陸は横田基地だもの。彼、元米軍パイロットだから。  
男1 すまん…。

男1。男2を引張って隣のほうへ。

男1 …詐欺だ、間違いない。  
男2 うーん…。  
男1 考える余地ないだろ。  
男2 横田基地からここまででは電車乗り継いで来てるんだろっか。  
男1 な、やっぱり変だろ。  
女1 いい加減にしてよ…  
男1・2 …。  
女1 そんな態度とるんじゃないかって思ったのよ。だから話すの嫌だったの。どうせ不釣り合いだっつて笑ってるんですよ。  
男1 そうじゃないよ。その男があまりにも判らないから。  
女1 判らないっつて、どういふことか。  
男1 そりやもちろん社長でパイロットの奴だっつているだろうし、自家用ジェット機で横田基

地に来ることだったってあるだろうけど……下山動物園でペンギンってのがどついても繋がらないんだよ。

女1 私が嘘をついてるって言うのね。

男1 逆だよ。つかれてるってこと。

女1 ……。

男2 おい、そりや言い過ぎだぞ。まだ判らないんだから。

女1 ハリスに会えば判ってもらえるわ。

男1 ハリスっていうのかその男。

女1 来月ここに来る筈だから。

男2 えっ、ホントに？

男1 そりやぜひ見てみたいな、ハリス。

女4 ……私も見たいですう。

男1 まだいたのか、あんた。

女4 抜けないんですう。

女1 だけど……運が悪いから、私。

男2 え。

女1 ……第一の手段も……第二の手段も……。私の運が悪いせいでハリスが詐欺呼ばわりされるのが、悔しいのよ。

男1 そうだな、詐欺ってのは違うな。だってお金とか渡してる訳じゃないんだから。

女1 ……。

男1 ……渡してるの？

女1 言ったでしょう。マレーシア進出の資金繰りが大変だって。

男1 いくら……。

女1 あなたには関係ないじゃないの。

男1 まあ……そりや。

女1 ……ごめんなきい。そうじゃなくなって……もともと私の中に少しだけ大丈夫かって不安があつて……今、第一の手段っていうの聞いたら、あまりに私にあてはまってるもんだから……。

男1 運が悪いってどうして。

女1 どうして……知らないわよ、そんなこと。

男1 そんなの勝手に悪いって思ってるだけじゃないのかな。

男2 運が悪いっていうのはああいふこと(女4)を言うんだよ。確率的にいったらヨロヤマさん運が悪い女ってことにはなるべしよ。

女1 ……。

男2 とりあえず、お参りしていただろう。

男1 え？

女1 そうね。

男1 おい、お前どこ行くんだ。

男2 小便、計りにいくんだよ。

男2、軽量コップを手に去って行った。

女1 今度はうまくいってるみたいね。

男1 何が。

女1 あの人、ちゃんとあなたの命狙ってくれてるんですよ。

男1 うーん：：前の奴よりはマシかな。

女1 言ってたわよ、そのうち本当に殺すことになるかもしれないって。

男1 そのために雇ってるんだから。そう思ってくれなきゃ困るよ。

女1 怖くないの？

男1 馬鹿だな、怖いからいいんじゃないか。：：でも、あいつにはもう少しヒリヒリしてて貴

いたいんだけどな。

女1 充実してるのね。

男1 充実？

女1 だって、勤めてた時より楽しそうなもの。

男1 そう見えるかな。

女1 うん、見える。：：私も誰かに頼もうかしら。

男1 ヨヤマさんには無理だよ。

女1 どうして。

男1 だってこれは俺が見つけた方法なんだから。

女1 ……

男1 よりよく生きていくためにさ。：：俺はただ死なずにいられてってことにそれを求めて

るだけだから。ヨヤマさんに当てはまるかどうかは判らないですよ。

女1 そうか：：そうよね。

男1 お参りするの。

女1 お願い。

男1、社の中に入る。

女1、お賽銭を入れて鈴を鳴らし拍手。

女1 ……どうかちゃんと結婚出来ますように：：ちゃんと結婚出来ますように：：ちゃんと

結婚出来ますように：：。

女1、もう一度鈴を鳴らし柏手。

女1 ……どうか幸せな毎日が訪れますように……幸せな毎日が訪れますように……幸せな毎日が訪れますように……。

男1 (社の中から声) コラ、一つだけだぞ。

女1、また鈴を鳴らしながら。

女1 いいじゃないの、ケチ。……(柏手)どうか楽しい生活が送れますように……楽しい生活が送れますように……楽しい生活が送れますように……。

女1、また鈴を鳴らして柏手。

女1のお参りが続く中……。

暗転

そして夜。

男2が石を削っている。

女4はまだ賽銭箱に横たわっている。

女2が紙袋を抱えてやって来た。

女2 こんにちは。

男2 こんにちは。

女2 一人ですか。

男2 今、中で寝てますけど……起こしましょうか。

女2 いえ、それには及びません。

男2 今頃どうしたんです。

女2 報告書を作り上げてから来たもんですから。

男2 こんな時間まで？

女2 こんな時間って、まだ十時過ぎですよ。

男2 十分遅いですよ。この辺は九時を過ぎるとめっきり人通りが無くなるんでね。

女2 あ……これなんですけど。

男2 何です。

女2 ムカデの薬です。……とてもたまらないって話でしたので、施工業者から買ってきまし  
た。

男2 そう、わざわざすみませんね。

女2 おっと、むやみに触っては駄目です。劇薬ですから。

男2 劇薬。

女2 素手で触るとただれます。

女2、ビニール袋をはめて。

女2 こうして……根元のあたりにパラパラと……この位でしょうかね。量は少なめに。風に  
舞うと気管支炎になりかねませんから注意してください。

男2 はい。

女2 わっ。

女2、女4に気付いたのだ。

女2 ……これ…何の罰です。

男2 いや、罰じゃないんですよ。

女2 でも縛られてるじゃないですか。

男2 まあ、これはほどこいても差し支えないんですけど…ほどこ？

女4 お願いします。

男2 賽銭取ろうとしてて抜けなくなっちゃったんですよ。

男2、しめ縄をほどいた。

女2 あの、ひよっとして、この人団子屋の…。

男2 ええ、よく知ってますね。

女2 あちこちで噂になってましたから。団子屋の奥さんが賽銭泥棒してたって。

女4 ああ…あの人だ…。

女2、引っ張ってみる。

女2 よっ…全然抜けませんね。

男2 ちよつとあんたそれ、薬触ったままじゃないの。

女2 あっ、ホントだ。

男2 おいおい顔中粉だらけだぞ。

女2 すみません。(思わず払う)

男2 だから手袋。

女2 ああ…もう…。

女2、手袋を外してハンカチで払う。

女2 石鹸水があれば抜けると思うんですけど。

男2 駄目駄目、そんなことに貴重な水は使えませんよ。

女2 水じゃなくても液体なら…ビールとかお酒とかでも。

男2 あ、そうか。そりゃ気付かなかったな。

女2 ありますか？

男2 ええ、お神酒がね。

女2 そうですか。なら、私そろそろ失礼します。

男2　ねえ、この薬飲むとどうなるんです。  
女2　そんな……イチコロですよ。  
男2　へえ……それじゃあ、気をつけて。  
女2　……失礼します。

女2、去った。

男2　あんた、大丈夫？  
女4　顔がもの凄く熱いです。  
男2　本当だ。……かなりの劇薬だ。

社の扉が開いた。

男1　今、誰か来た？  
男2　ああ、ちよつとね。酒、くれよ。  
男1　いいのか、飲んで。  
男2　石鹼水作るんだよ。この人そろそろ帰りたいだろうから。

男1は社の中にあつた一升瓶を男2に渡す。

男2　石鹼は？  
男1　これでどうだ。

社の中から紙袋を出した。

男2　なんだい、これ。  
男1　洗剤。分けてもらったんだ。

男2、女4の腕にお酒をかけて、さらに洗剤をふりかけたりしながら  
い。

男2　いいものが手に入ったぞ。  
男1　いいもの？  
男2　ムカデの薬。アンケートのねえちゃんが持ってきたんだ。  
男1　そう。  
男2　劇薬さ。飲むとイチコロだってさ。

男1 …ふうん。

男2 成程そういう手もあったんだな。

男1 …。

男2 殴る、刺す、絞める、突き落とす…いろいろ考えてきたんだがついに方法を見つけたよ。

男1 遅いよ。世間じゃ一番ポピュラーな方法じゃないか。

男2 飯の中か…酒の中か…どっちがいい。  
男1 任せるよ。

男1、社から出て手摺の方へ。

男2 おばさん、あとは自分でやってよ。

女4 すいません。

男1 …あれ？

男2 どうした。

男1 …また人が倒れてる。

男2 その手にのるか。

男1 …またあいつだ。

男2 え…本当だ。

男1 また殴られたのかな。

男2 そうだとしたら相当な恨みだぞ。

女4 やだなあ、うちの看板にもたれて

男2 うん、昨日も…あれ？いつの間に。

女4 あっ、抜けてました。

男1 なら、さっさと帰りなさい。

女4 お邪魔しました。

女4、顔をゴシゴシ擦りながら去っていった。

男2 …なあ…背中になにか刺さってるんじゃないか。

男1 …やっぱりそうだよな、あれ。

男2 …全然動かないし。

男1 今度はすぐに動くだろう。今、おばさんが帰ったからな。

しばらく…。

男1 …ほら、おばさん腰抜かした。  
男2 …あいつ、生きてるのかな。  
男1・2 あっ…立ち上がった。  
男1 不死身だな、あいつ。  
男2 おいおい、背中に刺したまま帰ってくぞ。  
男1 …。  
男2 …。  
男1 タクシー捕まえて行っちゃったな。  
男2 帰ったのか。  
男1 まさか、救急病院だろ。  
男2 神経どっかに置き忘れてるんだな。  
男1 無神経にもほどがある。  
男2 あれ…今度はおばさんが動かない。  
男1 おばさん、激動の一日。  
男2 お前、また朝まで眺めるつもりか。  
男1 もちろん、こうなった以上はな。

男2、鳥居の横に置かれていたポットからコーヒーを注いで。

男2 コーヒー飲むか。  
男1 ああ。

男2、コーヒーの中にムカデの薬を入れた。

男2 はい。  
男1 ありがと。…どうしたんだ、このコーヒー。  
男2 ヨヤマさんが持ってきたんだ、お湯と間違えて。  
男1 それじゃあ、お前…。  
男2 そう、結局あと300ミリリットル足りないんだ。  
男1 やばいんじゃないのか、それ。  
男2 うん、どうなるんだろう。  
男1 おい、頼むぞ。お前が先に倒れちゃったら困るじゃないか。  
男2 そうなんだよな…一日くらいは平気だと思っただけど。  
男1 明日、ついでに買ってきてやるよ。  
男2 売ってたらな。

男2、石を削り始めた。

男2 ……俺、なんとなく判った気がしたよ。  
判ったって？

男2 お前が俺を雇った理由が、さ。  
男1 そんなことか。

男2 今朝の目覚めがちょっと違ってたんだ、病気を宣告される前とさ。ああ、今日も俺は生きてるんじゃないかって、そう思ったんだ。

男1 明日はもつと実感できるぞ。

男2 ああ、今から下キドキしてる。なんたって300ミリリットル足りないんだから。

男1 ただし、これからはしっかりと健康管理してもらってからな。

男2 判ってる。……でもこれでお前とイーブンってわけだ。

男1 イーブン？

男2 お前は自分の雇った男に命を狙われて、俺は自分の腎臓に命を狙われている。

男1 なるほど、そう言われりやそつだな。

男2 俺も明日から散歩でもしようかな。

男1 勝手にしろよ。

と、男1はコーヒーを啜った。

男1 !

男1、慌ててコーヒーを吐き出した。

男2 おいおい、気をつけてくれなきゃ駄目だぜ。簡単にポックリいかれちゃ張り合  
いねえからな。

男1 ……。

男1、吐いている。

男2、石を削り続けている。

暗転

翌日の昼に近い朝。

サングラスを掛け、口髭をたくわえた、いかにもパイロットといった姿の男4が立っている。

男4

…。

男4、ガムを噛んでいる。

男4

…。

おもむろにポケットからタコ糸を取り出すとその先にガムをつけた。

男4

…。

もちろん、お賽銭を盗るためであろう。

男4が賽銭箱に糸を垂らしていると、社の扉がゆっくり開いた。

男1

…何してる。

男4

…ホワイ？

男4、簡単に男1に捕まってしまった。

男4

すみません…つい…。

男1

何が、ついだ。

男4

もうしません。もうしません。

男1、男4のサングラスを取る。

男4

ああ、取らないで。

男1 あんた、見ない顔だな。  
男4 ……  
男1 あんた、それつけ髭だろ。  
男4 取らないで。  
男1 この野郎、つまらない変装しやがって。来い。  
男4 どこに…。  
男1 警察に突き出してやる。  
男4 すいません、すいません。

と、いつの間にか男2が出入り口のところに立っている。

男2 警察なんかじゃ駄目だ。調書とってハイ、オシマイだからな。  
男1 おつ、おかえり。どうだった。  
男2 うん、よかったよ。実にしみじみとした時間だった。初めてだな、こんないい散歩が出来たのは。  
男1 水は？  
男2 あれ？お前、買ってくるって言ってたろ。  
男1 俺が店の前を通った時にはまだ閉まってたんだ。  
男2 二十四時間開いてるところがあるだろう。  
男1 俺が歩いたルートには無かったんだよ。  
男2 やっぱりな。そんなことだろうと思ってたよ。  
男1 なら買ってくれば良かったじゃないか。  
男2 さっきヨヤマさんに頼んでおいたんだ。  
男1 またコーヒーだったりしないかな。  
男2 今度は大丈夫だろ。…それより、こいつだな。  
男1 どうしてやろうかな。  
男2 ここから逆さ吊りするのはどうかな。  
男1 それより裸にひん剥いて市中引き回してのはどうだろう。  
男2 よし、それでいこう。  
男4 すいません、すいません。

と、そこに女1、ポットを持って現れる。

女1 あら、どうしたんです。  
男1 賽銭泥棒だよ。  
女1 また？

男1 今度は本物。これ（タコ糸）が証拠だ。  
女1 ああつ。

男1・2 ?

男4 ……ミス・ヨコヤマ……。

女1 ……ハリス。

男1・2 ええつ。

女1 ちよつと離しなさいよ、あんた達。……大丈夫、ハリス。

男4 まったく、日本の男は乱暴だね。

男1 ……ハリスって……こいつが？

女1 いつもいきなり現れるんだもの。ビックリするじゃない。

男4 僕は風さ。風はいきなりやってきて、心をさらってしまっんだ。

女1 逢いたかった。

男4 そうだね。

二人、ひしと抱き合う。

男1 ……目眩がしてきた。

男2 おい、大丈夫か。

男1 どう見たって、こんな奴が世界を股にかけてるとは思えないぞ。

男2 そんなことより完璧な日本人じゃないか。

女1 外人離れしてるってよく言われるのよね。

男4 そうだね。

男2 四十二歳って言ってなかったっけ。

女1 歳より若く見えるって言わなかったかしら。

男2 見えるも何も実際若造じゃないか。

男4 「ワカゾウ」ってインドゾウ？

男2 何を言ってるんだ、この男は。

男1 ……繋がった。

男2 え、何がどう繋がったんだ。

男1 この男なら下山動物園でペンギン眺めてるよ。ペンギンにポップコーンぶつけて  
喜んでる姿が目に見えんぞ。

男2 髭がズレてるしな。

女1、男4の髭を直して

女1 はい、ちゃんとしてなきゃ。

男4 そうですね。  
女1 来るの来月だって言っただけだった？  
男4 ああ、その筈だったんだけどね……。  
女1 何かあったの。  
男4 言い難いことなんだ……。  
女1 何？言っただらんないよ。  
男4 ……例のマレーシアの件なんだ。  
女1 ああ……。  
男4 土地の権利を巡って、資金的に重大な局面を向かえていてね。  
女1 その話は「こ」で……。  
男4 そうか、そうだね。  
女1 でも、大丈夫だから。  
男4 ありがとう、本当に助かるよ。  
女1 また、すぐに帰っちゃおうの？  
男4 ああ、忙しくて疲れてて時間が無いからね。  
女1 そう……。場所、変えましょうか。  
男4 そうだね。  
男1 おい、待てよ……。ヨヤマさん、判ってるんだろ。そいつは詐欺じゃないか。  
女1 ……。  
男1 いや、そんな奴詐欺なんて上等なシロモノじゃないよ。  
女1 ……。  
男1 ヨヤマさん、しっかりしろよ……。あんだ、何やってるの。  
女1 さっきから何を見てるの……。恋愛をしているのよ。  
男1 ……。  
女1 おい……。  
男1 話にならんよ。

男1、社の中に入ってしまおう。  
と、そこに男3がやって来た。

女1 あ……。  
男3 やっぱりこんな所にい。  
女1 ……。  
男3 今、病院から戻ったところなんですよ。  
女1 ……。  
男3 あれ、何を驚いた顔してるの。

女1 ……別に。

男3 「一月くらい入院するって思ってたんですよ。

女1 ハリス、御免なさい。先に行行って…いつも一緒にコーヒーを飲む、あの喫茶店。

男4 どうしたの。

女1 仕事の話なのよ。

男4 ……(男3を見た)。

女1 お願い…すぐに行くから。  
男4 判った。

男4、去った。

男3 (男2に)あの人、誰です。

男2 え…ヨヤマさんの彼氏らしいんだけど。

男3 そっか、じゃああの男のために…。

女1 ……そっよ。

男3 そうそっ、ヨヤマさんに返す物があったんだ。

女1 ……。

男3 これ、「お守り」でしょ。

と、のみを出した。

男2 あ、そのみ…どこにあったの。

男3 俺の背中ですよ。

男2 え…。

男3 また昨日、課長に怒鳴られちゃいましてね。遅くまで残業ですわ。エレベーターを降りたところでまたガツン、さらにグサリ…あとは何かなんだか判らなくて、気が付いたら家にいました。上着脱ごうとして驚きましたよ。

男2 でも、あんたタクシーで帰ったんだよ。

男3 なら、また見てたんですか。

男2 ああ。

男3 じゃあ犯人見ませんでした？おそろく背が低めの女の人だと思うんだけど。

男2 ……。

男3 そうかあ、残念だなあ。

女1 もういいわよ。

男3 何がいいの。

女1 あんた、よく平気だったわね。

男3 一週間前から腰が悪くてさ。コルセットはめてるの。ほら、こんな丈夫な奴。

女1 おかげで三針縫いましたよ。

女1 コルセット…。

男3 ヨヤマさん、運、悪いよね。

女1 …。

男2 …どうどう。

女1 (男2に)私ね、この男にたかられたの。

男3 おいおい、そんなこと言っちゃっていいのかよ。

女1 もう、ずっと…。

男2 どうして。

女1 私、経理を誤魔化して会社のお金、ハリスに使い込んでしまっただけ。それ、こ

の男にバレちゃったの。

男2 …。

女1 私、そろそろこの会社辞めようと思ってたから、退職金で穴埋めしようと思

ってたんだけど…甘かったな。

男3 ヨヤマさん、どういうつもり。何、被害者ぶってるの。自業自得だろ、

女1 そうね、自業自得よね。

男3 全部話せばどういかなるって思ってたんじゃないだろうね。

女1 馬鹿ね。思っていないわよ、そんなこと。

男3 …。

女1 …もう、どうにもならないって思ってるのよ。

女1、ポットを手にした。

女1 そうか、夢ってのは生活の一部だったのね…良い夢も、悪い夢も…水、ち

よっと頂戴ね。コップ一杯だけ。

男2 …どうぞ。

女1 そうだ、あの人に言っといて下さい。釘抜き、私のロッカーの奥にありますか

らうして。

男2 はあ…。

女1 これでしょ、あなたがさっき言ったの。ちょっと借りていくわ。

男2 ヨヤマさん、それ…。

女1、紙袋を掴んで走り去った。

男3 ……どうしたんだろ。え？彼女何持って行ったの？  
男2 ……  
男3 まいったなあ。ちょっと追いつめちゃったかなあ。

と、男1が社の中から出てきた。

…。

男1 ……ちよつ…ちよつと…。

そのまま男3を出入り口の外に放り出した。

男1 二度と屋上に顔出すんじゃないやねえ！…まったく……どいっつも…いっつも……せつかくいい朝を迎えたと思ってたのに……台無しだよ、台無し。

ああ……そうだな。

男1 ……「殺意は怒りの延長線上にはない。それは深い絶望の果てに生まれるのだ」……ってのは本当だな。

宮沢大蔵大臣の言葉だっけ。

男1 日本の政治家がそんな気の利いたこと言うか。

男1、石を削り始める。

男2 おい、何してんだ。

男1 見りや判るだろ、狐作ってんだよ。

男2 どうしてお前が作るんだ。

男1 やっぱり『お稲荷さん』には狐が必要だ。あるべきものがないからスッキリしないんだ。

男2 お、やっと思見があつたな。

男1 イーブンなんだろ。

男2、もう一つの紙袋を手にして

男2 なあ、ヨヤマさんはやっぱり運が悪い女なのかな。  
男1 運が悪くない女だって言ったのはお前だぞ。  
男2 そうだよな。

男2、その粉を竹の根元に撒きながら

男2 洗剤じゃあ死ねないわな。

と、買い物帰りといった感じの女3がやって来た。

女3 こんにちは。

男1 こんにちは。

女3 お参り……いいい？

男1 いいですよ。……おい。

男2 俺？

男1 イーブンなんだろ。

男2 ……。

男2、社の中に入った。

女3はお賽銭を入れて鈴を鳴らして柏手。

女3 ……どうか猫のミニミちゃんが見つかりますように……猫のミニミちゃんが見つかりますように……猫のミニミちゃんが見つかりますように……。

と、もう一度柏手。

女3 それじゃ、よろしく。

男1 どうも。

女3、去った。

男2、出てくる。

男2 またか、あそこの猫すぐに家出しやがる。

男1 お前、アキヤマさんとこの家庭教師。

男2 そんなのもあるのか。

男1 時間指定してたぞ。「……どうか五時に算数の宿題が出来ますように」  
男2 とりあえずミニミちゃん探してくるよ。

男2、猫じゃらしを持って去っていった。

男1 ……。

男1は石を削り続けている。  
と、ホツンとひと雫……。

男1 あ……雨が……。

と、男2はすぐに戻ってきた。

男2 ……ミミちゃんってどんな猫なんだろう。

男1 黒いブチの雌猫だよ。……おい、傘持っていけよ。

男2 え？

二人、空を見上げる。

そして男2はコウモリ傘を手にしてまた去っていった。

男1は石を削り続ける。

カラ梅雨にひと雫の雨……。

【完】